

『歩む』

池田薫

8,723 字

<あらすじ>

何となく不安で、憂鬱で、何一つうまくいかない。漠然としたもやもやを抱えた就職活動中の「俺」。何気なく始めた掃除をきっかけに、心が整理され、もやもやが分解されていく。

「なあ、あの子クビになるらしいよ」

「あの子って？」

俺は貴志の方を見もせず、適当に言葉を返した。早歩きなんてしたら汗だくになってしまうけど、そんなことも言っていない。どうしてあと五分早く起きることができないのか。何度後悔しても、結局毎朝ギリギリにしか起きられない。そういうものなのだ。

バスはすでに停車していて、乗客が乗り込むところだった。本当にギリギリだ。サラリーマンの後ろに続いて席を確保すると、貴志はやっと喋れるとばかりにこちらを向いて、大袈裟な表情を作った。

「あの子だよ！ うちの管理人の！」

「ああ、そうなんだ。なんで？」

俺と貴志は同じマンションに住んでいる。小学校に上がる前に、新築だったあのマンションに引っ越してきて、それから小・中・高、そして大学の学部まで同じところを選んだものだから、長い間こうして一緒に通学しているのだ。

「なんか、マンションのおばちゃんたちが、あの子掃除ちゃんとしらないから別の人と替えてくれって管理会社にクレームつけたらしい」

「そうなんだ、残念だね」

残念。それは本心だった。若くて可愛い管理人なんて滅多にいるもんじゃない。別の管理人が来るとしたら、それはほぼ確実におばさんか、もしくはおばあさんだろう。しかし、今はそんなことに気を取られている場合ではないのだ。俺はバッグから民法の一問一答式の問題集を取り出して、無言で勉強を始めた。移動時間だって馬鹿にはできない。この五分、十分が、一点差、二点差になって、一年を無駄にすることもありえるのだから。貴志はまだ何かごちゃごちゃと言っていたが、やがてわざとらしくため息を吐いて、静かに参考書を読み始めた。いつまでもふざけてはられない。俺たちが子供でいられる時間はもう終わったのだ。

麦茶を取りにリビングに行くと、父が三角錐の袋に入った枝豆を食べながら、ビールを飲んでいて。テレビでは白髪交じりの学者が何かきつと大事なことを話していたが、控えめな音量のせいで一つも聞き取れなかった。

「お前、学校ではちゃんとしたもん食ってるんだろうな？」

「まあ、そこそこね」

「ちゃんと野菜食えよ」

コンビニ弁当の残骸を見て、「あんたもね」と目だけで返事をする、俺はコップを片手にリビングを出た。三年前に母が死んでから、父と俺は家族と言うよりシェアハウスの住人同士のような関係になった。父は仕事で忙しいし、俺は大学で忙しい。今は公務員試験の勉強で。お互い自分の面倒は自分で見るというルールは、どちらが口にすることもなく自然と定着した。

ぼんやり歩いていると、急に足元が滑った。落ちていたチラシを踏んだのだ。麦茶はなんとか無事だった。俺はその胡散臭い健康食品のチラシを拾い上げ、くしゃっと丸めた。男の二人暮らしでは、気を付けて歩かないと時々こういう目に遭う。家の中は、母がいた頃とは全く変わってしまっていた。隅に溜まった埃は、小さな塊を形成しつつあった。放っておいたら、西部劇に出てくるあの草のように、この狭い廊下を転がるかもしれない。

新しい管理人を見たのは、貴志があの話をしてから一カ月ほど後のことだった。エントランス前を掃いている見覚えのないおばさんがそうだった。五十歳といったところか。彼女は俺を見ると、にこやかに「行ってらっしゃい」と言った。俺は小さく会釈をしてバス停に急いだ。

貴志はもう会っただろうか。がっかりした顔が目浮かぶようだ。そう言えば、ここしばらくあいつを見ていない。四年生はそもそもほとんど授業がなく、公務員講座のために学校に通っているようなものだった。公務員一本の俺をよそに、貴志はダメ元で受けていた民間企業から内定が出て、一足先に就活を終えたのだ。インフラ系の大企業。公務員に未練なんか全くないだろう。初めてあいつを羨ましいと思ったし、なんであいつがとも思った。俺は友達甲斐のない人間なのだ。

永遠に続くように思われた公務員講座も、ついに終わりを迎えた。これから本格的に就活が始まる。その実感は無かったが、もうこの殺気立った集まりに来なくて良いのだと思うと少しほっとした。しかし、席を立つ学生は誰一人笑っていなかった。皆この世の終わりのような顔をして、下向き加減に教室を出て

行った。いつもはしゃいでいる印象だった名前のわからない彼も、今ではこの陰鬱な群れにきちんと納まっていた。

家での勉強は、はっきり言って捗らなかった。自分は黙々と勉強するのが得意、そう思っていた。実際、大学受験まではそうだったのだ。しかし今は、静かな部屋で分厚い参考書を読んでいると、地に足が着いていないような、何となく落ち着かない気持ちになった。

昼食にしようと戸棚を開けたが、カップラーメンもシリアルも切餅も、何も見つからなかった。密かに楽しみにしていた新発売のカップ焼きそばも、どうやら父が食べてしまったようだった。俺は仕方なく出かける準備をした。準備と言っても、ジーパンを履いて適当に髪を梳かすだけだ。

三日ぶりに外に出ると、目の奥が鈍く痛んだ。つい最近まで肌寒かった空気は、すでに夏の気配を含んでいた。そろそろ半袖にしても良いかもしれない。エントランスを出てすぐのところで、管理人が植栽の手入れをしていた。彼女は俺に気付くと、愛想の良い笑顔で「こんにちは」と言った。俺はこの前と同じように小さく会釈をした。寝巻にしていたTシャツにジーパンにサンダル。ちょっとコンビニに行くだけというスタイルを、自分を知っている誰かに見られるのは好ましいことではなかった。俺は予定を変更して、自転車でスーパーに向かい、食料を多めに買い込んだ。もちろん焼きそばも忘れずに買った。

マンションに戻ると、もう管理人の姿はなかった。郵便受けには数日分の郵便物が溜まっていて、片手で取り出そうとすると案の定いくつものハガキや封書が落下した。父が毎日帰宅時にチェックしてくれれば良いのだが、なぜか父にはその習慣が付かない。だから、俺が外に出たときは、今日のように両手が塞がっていようとも、必ず郵便受けを見なければならなかった。

ハガキを拾うのに身を屈めると、ふと床に目が行った。タイルが艶々と光っている。いつも砂や埃でザラザラとしていた床が、ここ数年見ないほど綺麗になっているのだ。顔を上げて周囲を見回すと、隅に置かれた黒皮のソファからは子供たちの靴跡が消え、自動ドアにベタベタと付いていた小さな手の跡も無くなっていた。エレベーターの中も、緑がかった通路の壁も、黄砂に塗れていた手すりもさっぱりと掃除されて、まるで別のマンションのようだった。建物全体

に充満していた薄気味悪さは、もうどこにも無かった。掃除ぐらいでこんなに違うものかと俺は感心した。おばちゃんたちの言う通り、管理人は替わるべきだったのだろう。

生活リズムが整ってくると、講師が合格の絶対条件とした「一日十時間以上」の勉強も毎日こなせるようになった。七時に起きて二十四時に寝るまで、食事や風呂の時間以外はほとんど机に向かった。目や頭が疲れると、外に出て階段を上り下りしたり、ベランダから人や車の往来を眺めたりした。昼間はいつも、向かいの家のおじいさんが家庭菜園と言うには少々立派すぎる畑で野菜の世話をしていた。夕方になるとおじいさんはいなくなり、代わりに制服を着た少年少女が重そうな鞆を持ってあちこちに現れた。もう少し遅い時間になると車が増えて、時折赤いブレーキランプの列ができた。

自分が狭い空間に閉じこもっている間にも、多くの人や物事が絶えず動いている。それを上から眺めていると不思議な気分になった。誰もこちらには気が付かない。もしかしたら、自分はみんなとは別の世界に入り込んでしまったのかもしれない。でも、それならそれで良かった。勉強は嫌いではないし、何より今の生活は平穏だった。朝晩に父親と少し話すほかは誰とも会わず、何にも影響されず、ひたすら自分のペースで動く。とても理想的だ。

そこまで考えると、俺は大きく息を吐いた。現実感を失いつつある、そう思った。

原因の一部はおそらく貴志だ。これほど長い間あいつの顔を見ないのは、知り合ってから以来初めてのことであった。小学校からほとんど毎朝一緒に登校してきたし、互いの家もよく行き来した。大学生になってからも、あいつは暇になるとすぐ俺の部屋に来た。クラス替えや進学で周りの友人が何度入れ替わっても、俺たちの関係はずっと変わらなかった。しかし今は、あいつと最後に会ってから二カ月近くが経とうとしていた。そのことが、俺の世界の現実感を少なからず薄めているような気がした。

きっとあいつは俺を避けているのだろう。俺が無意識にそうしているように。どこかで顔を合わせても、今まで通り自然に話せるとは思えなかった。でも、それは仕方のないことだ。生きていれば色んな事情で色んなものを失う。そしてそ

のうちの多くは二度と戻ってこない。

一次試験の日の朝は、雨がぱらついていた。会場の中学校には想像以上に多くの受験者が集まっていて、通りすがりに見た教室はどこも満席だった。こんなに大勢が受けに来ても、最終的に合格するのは二十人ほどだ。自分がその狭き門に挑もうとしているなんて、とても信じられなかった。

参考書を読んでいるうちに、雨は本降りになった。ザアザアという音とそれに混じる受験者の話し声が、俺の集中力をどこか遠くへ押しやった。どうせ最後の確認をしていただけた。俺は参考書を閉じてバッグにしまい、目を瞑った。雨の日は苦手なのだ。特に強い雨の日は。

試験が始まっても、俺の集中力は戻って来なかった。雨が校庭の土を打つ音、金属製の雨樋が鳴る音、鉛筆が机を叩く音。試験官が歩き回る音に、誰かが鼻をかむ音。一度気になり出すと、もうどうしようもなかった。資料も問題文も頭に入らない。昔から本番に弱いタイプだからこそ、何事にも万全の態勢で臨んできた。今日の試験だって勉強は十二分にしてきた。どの問題も解けるはずだ。しかし、どんなに待ってみても混乱は収まらなかった。焦れば焦るほどミスが増え、時間を取られた。しまいには耳鳴りまでしだした。

すべての科目が終わると、俺は下を向いてぎゅっと目を閉じた。それから人の波に吞まれるようにして会場を出た。

雨脚は強まる一方で、あっという間に靴下まで濡れた。マンションに着く頃には、一歩ごとに靴底から変な音がした。自動ドアの前に敷かれたマットは踏むと水が出るほどぐちゃぐちゃで、エントランスの床には誰かが泥を付けて歩いた跡があった。明日管理人が見たら、きつとがっかりするだろう。

重くなった服を剥がすように脱いでシャワーを浴びると、部屋着を着てベッドに仰向けになった。うっかり蹴飛ばして崩れた参考書の山が視界に入ったが、起き上がって積み直す気力は無かった。雨は一向に降り止む気配を見せない。一体どこにこれほどの水分を蓄えていたのだろう。

頭の中で、一滴の雨粒がコンクリートの上を流れていった。雨粒は川に合流し、やがて海に流れ込んだ。大きな海に紛れたその一滴は、いつ地上に戻っ

てくるのだろう。もしかしたら、もう戻ってこないかもしれない。俺が失ってきたものたちのように。でも、大丈夫だ。そのうちには忘れるし、そうすれば悲しみも消える。

ダイジョーブ。水色のイルカが言った。幼い頃に水族館で買ってもらったぬいぐるみのイルカだ。大事に持ち歩いているうちにどこかで落として、それきり見つからなかった。随分悲しかった覚えがあるが、今の今まで存在すら忘れていた。そう、大丈夫なのだ。忘れてしまうのだから。

イルカは海の中をゆらゆらと泳ぐように沈んでいった。そして、俺の意識はそこで途切れた。

次に目を開けると、外は明るくなっていて、時計は十二時を指していた。久しぶりに自分が大学生であることを実感した。寝すぎたせいで頭も体も重く、やはり何かする気にはなれなかった。

そんな状態で数日を過ごす、台所にはカップラーメンの容器やら空のペットボトルやらが溜まって、顔には無精ひげが生えた。面接練習の日にはちゃんと学校に行ったが、ひげを剃ってスーツを着ても、気持ちは引き締まらなかった。

思えば母が死んでからというもの、何一つうまくいったためしなかった。やること為すこと全てが失敗というわけではないが、少なくとも良いことは一つもなかった。一年半ほど付き合った彼女には振られたし、希望したゼミの選抜に漏れて、出来損ないの寄せ集めのようなゼミに所属した。いつのまにか友人のグループとは距離ができてしまったし、急に歯の根元が膿んで、治療を終えるまでにやけに時間がかかった。厄年はいつなのかネット検索してしまうほどろくでもないことばかり起きたが、それでも毎日やるべきことをやった。授業は毎回きちんと出席したし、取れる単位はすべて取った。公務員講座が始まるまではコンビニでアルバイトをして、そのお金で自動車教習所にも通った。ともすれば沈んでしまいそうな気持ちをごまかすように、毎日着々と前に進んできたのだ。それなのにあの雨の日、俺はぬかるみに足を取られて、次の一步を踏み出すことができなかった。ふと顔を上げると、行く先には何も見えない。歩いてきた足跡は雨で流れてしまった。次第にどちらが前でどちらが後ろなのかもわからなくな

った。

就職支援室の職員が呆れた顔で、志望動機はもっと具体的にとかあなたの強みは何かとか色々と言ってきたが、それらはほとんど耳をすり抜けていっただけだった。何のためにこんなことをしているのか、今の自分には理解できなかった。きちんと就職をして、世の中の多くの人と同じように働き、いつかは家庭を持つ。そんなまともなことが自分の身に起こるとは、とても思えなかった。「どうしてもここで働きたいです！」というような顔でハキハキと質問に答える他の学生が、どこか別の星から来た別の生き物のように見えた。

「自己分析シート」なるものの空欄は、何時間経っても一つも埋まらなかった。シャープペンがコツコツと硬い音を立てる度に、紙の上の黒い点だけが無意味に増えた。正午を知らせる防災無線がひどく頭に響く。「市民の歌」。聞き慣れた垢抜けないメロディーが神経をちりちりと刺激した。少し寝た方が良いかもしれない。一週間も不規則な生活をしてきたせいも、昨夜はほとんど眠れなかったのだ。

しかし、ベッドに仰向けになって天井を見つめていても、眠気は一向にやって来なかった。眠くはないが、動く気力もない。目を瞑り、長く息を吐くと、吸い込むのが億劫になって俺は呼吸を止めた。そうしていると、自分の全機能が停止したような感じがして、不思議と安らかな気持ちになった。もしかしたらこのまま心臓が止まってくれるかもしれない。そんな期待を込めてしばらくそのままだったが、すぐに苦しくなって大きく息を吸い込んだ。死は、若くて健康な体にそう易々と訪れるものではないのだ。

やれやれ、と心の中でつぶやいて俺は体を起こした。たとえやる気が出なくても、後先考えずにすべてを放棄するなんてことはできない性格だった。仕方がない。本格的に死のうという気がないのなら、いつまでもこうしているわけにはいかないのだ。生きていくには収入が必要で、そのためには就活をしなければならない。それでも、今すぐに机に向かって自分の長所や短所について考える気には到底なれなかった。俺はとりあえず、床に散らばった参考書や問題集を拾い集め、一冊ずつ本棚に戻した。こうやって作業をしているうちに、何か思い付くかもしれない。それに、この荒れた部屋は秩序を取り戻す必要がある。

しまえるものをしまって不要なものを捨てる、部屋はだいぶ片付いた。男子学生の部屋としては、かなりまともな部類に入るだろう。床の埃は粘着テープでは取りきれず、掃除機を引っ張り出した。小型で軽量のピンク色の掃除機だ。見るのはいつ振りかと考えてぞっとした。部屋の埃をあらかじめ吸ってしまうと、俺は家中すべての床を掃除して歩いた。今一つ綺麗にならなかったリビングの床には、ウェットタイプのフロアモップも掛けた。リビングと台所のゴミをまとめ、一人分の食事スペースしか空いていないテーブルの上を片付けて、濡らしたキッチンペーパーでしっかり拭いた。最後に、排気ガスやら何やらで黒く汚れた窓を何度も拭いた。

一通り掃除が終わると、家の中は見違えるように綺麗になった。埃の塊はもうどこにもないし、窓は誤ってぶつかりそうなほど透き通っている。手が少しごわつくが、久しぶりに晴れやかな気持ちだった。とても久しぶりに。

ガラス越しに見える遠くの山々は藍色の影になり、灰色がかった雲は橙に染まった。窓を開けて空気を入れると、夏の夕暮れの匂いがした。そろそろ前向きになっても良い頃だ。試験は不出来だったし、自分がハキハキと面接を受けているところはやはり想像できなかったが、それでも何となく、もう悪いことは起こらないような気がした。歯の根元だって、もう膿んでいない。

「悩んだときは掃除をしなさい」。

母が言った。もうずっと昔のことだ。

「部屋が綺麗になったら気持ちもすっきりするし、きつとうまくいくって思えるから」

「でも、問題は解決しないかもしれない」

「そうね、問題は解決しないかもしれない。だけど部屋は綺麗になる」

俺が「子供騙しだ」と言うと、母は可笑しそうに笑った。

日が沈んでからも、俺はしばらく外を眺めていた。母もよくこうして窓際に立って、遠くを眺めていた。彼女は「山がすごく綺麗に見えるから」と言って、毎朝窓を拭いた。それから床に丁寧にモップを掛けて、時々ワックスも掛けた。荷物は何でもきちんと棚に収納して、俺が何か探しているとすぐに見つけてくれた。

「ちゃんとしまっておかないから探すようになるのよ」、いつもそう言われた。あの頃は当たり前で、煩わしいとさえ思っていたことが、今ではすべて懐かしかった。

辺りはすっかり暗くなって、山も雲も闇に溶け込んだ。見えるのは鮮やかに光るコンビニの看板と車のヘッドライトとガラスに映った自分の姿だけだった。俺は諦めてカーテンを閉めると、ダイニングテーブルの椅子を引いて座った。以前は決まって座っていた席だ。シンプルな木製の椅子の背もたれには、昔好きだったキャラクターのシールがたくさん貼られている。俺は色褪せたシールの表面を撫でながら、ただそこに座ってぼんやりとしていた。

「母さんがいた頃みたいだな」

いつもより少し早く帰宅した父が、ぽつっと言った。

「本当に。母さんがいた頃みたいだね」

「母さん」。父も俺もずっと口にできなかった言葉だ。考えなければ悲しみは襲ってこない。だから心の奥深くにしまい込んで、見ないようにしてきたのだ。三年ぶりに発したその言葉は、思っていたよりもずっと深く胸に刺さった。傷口からは血が流れて、痛みで涙が出た。でもこれは必要な痛みだ。大切な人がそこにいた証だ。

顔を上げると、父も泣いていた。俺が泣くのも、父が泣いているのを見るのも、母の葬式以来だった。

あの日は朝から雨が降っていた。とても冷たい雨だ。葬式が終わると、母の棺がゆっくりと黒塗りの車に載せられた。濡れたアスファルトと排気ガスの匂いがした。俺は位牌を持ってその車に乗り込んだ。

雨のせいか道が混んでいた。郊外へ向かう陸橋では渋滞が起きていた。すれ違う車の運転手は皆、一様にこちらを見た。手を合わせる人さえいた。まるで現実感がなかった。雨粒が窓に当たってザアザアと音を立てた。他には何の音もしなかった。カラスの群れが静かに飛んで行った。これは夢かもしれない。そう思うと、気持ちが少しだけ楽になった。それから俺はずっとその夢の中にいたのだ。そして今ようやく、ドアを開けて外に降り立った。

冷たい雨がザアザアと降っている。痛いほど冷たい雨だ。それでも、視界は

はっきりしていた。大丈夫、歩き出せる。雨だっていつかは上がるだろう。

俺たちは久しぶりに一緒に夕食をとった。コンビニ弁当とカップラーメンをつまみながら、時々泣いて、笑って、母の話をした。家族らしい時間だった。父と話をしながら、俺は三年ぶりに家族写真を真っ直ぐ見ることができた。母が気に入って棚の上に飾っていた写真だ。父と俺の間で、母は楽しそうに笑っていた。俺は写真の中の母にそっと笑い返した。

どうしてあと五分早く起きることができないのか。使い慣れない黒のビジネスバッグにネクタイをねじ込むと、走って玄関を出た。幸運なことに、エレベーターはうちの階に停まっていた。ひんやりとしたエントランスを抜けると、外は焼けるような暑さだった。

箒の音が聞こえてそちらを向くと、管理人がゴミ捨て場の掃除をしていた。彼女は俺の方を見ると、手を止めて「いってらっしゃい」と言った。俺は会釈をしてから、できるだけ自然に「行ってきます」と言った。彼女は一瞬意外そうな顔をして、それからやはり愛想良く笑った。

「歩！ ちょっと待って！」

聞き慣れた声に振り返ると、貴志がこちらへ走ってくるころだった。

「一次受かったって？ さすがだな」

「まあね。お前も学校？ バス、結構ギリギリだよ」

俺たちは一緒に走り出した。貴志がふざけるから、俺は走りながら何度も笑って、その度に脇腹をつりそうになった。俺たちは相変わらず俺たちだった。何も変わってなんかいない。

あの古い家を曲がれば、バス停はすぐそこだ。俺は手の甲で額の汗を拭いて、時計を確認した。もう焦る必要はない。ここからはゆっくり歩いて行こう。